

研究ノート

南フランス・ドローム県中部のロマネスク聖堂（3）

Les Églises Romanes dans la Drôme : Vallée de La Drôme et Le Diois.

中川 久嗣*

本稿では、前稿に引き続き、南フランス・ドローム県中部に点在する中世のロマネスク聖堂について、可能な限り知りうるものすべてを実地に訪問調査し、考察・検討を加える。具体的にはドローム川流域のクレ（Crest）とその周辺地域に点在する聖堂を対象とする。ローム溪谷下流域では重要な都市であるクレには、ロマネスク聖堂は現存しないが、その城塔はロマネスク期のものでもあるので、項目を立てて記述した。

本稿で取り扱う聖堂は、ロマネスク期とは言っても厳密な時代の限定はせず、11-12世紀のいわゆる盛期のロマネスク期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のものから、大なり小なりその時代の部分が残っているもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる。

聖堂の配列は、便宜的にドロームの県番号（26）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した。ここで言う「大まかな地域」は、行政単位としての「郡」（arrondissement）や「小郡」（canton）には必ずしも正確に対応してはいない。また同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。

聖堂は、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」あるいは「礼拝堂」を用いた。また聖堂内にある「chapelle」は「礼拝室」とした。個々の地名や聖堂の名称については、現地の慣用のものを採用した。

採りあげる聖堂は、基本的にすべて筆者が直接訪問・調査したものである。私有地あるいはアクセス困難な場所にあるなどの理由で訪問調査できなかった聖堂には▲を記した。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここ

* 東海大学文化社会学部ヨーロッパ・アメリカ学科

に掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ (<http://nn-provence.com>) で閲覧可能である。各聖堂のビブリオグラフィーはそれぞれの聖堂ごとに記してあるが、参考文献リストと略記号は本稿の最後にまとめて掲げた。

26.3 ドローム川流域 ークレおよびディーとその周辺地域

26.3.1 ミルマンド／サント＝フォワ教会 (Église Sainte-Foy, Mirmande)

ミルマンドはローヌ川に沿って走る国道 N7 とクレから来る県道 D104 が交わるロリオル＝シュル＝ドローム (Loriol-sur-Drôme) から南へ約 7.5 キロ、クレからだと D104 と D204 を経由して西へおよそ 20 キロに位置する住民およそ 500 人の村である。高さおよそ 250 メートルの小山の斜面に中世の面影を色濃く残す家々が立ち並び、その一番高いところにサント＝フォワ教会が建っている。

この聖堂は、最初はその名からも分かるように、コンクのサント＝フォワ修道院によってこの地に創建されたベネディクト派小修道院 (プリウレ) の付属聖堂であったとされる。ミルマンドには、もともと平地部に古いサン＝ディディエ教会があったが (現存せず)、後にサント＝フォワが教区教会の役割を引き継いだ。建設は 12 世紀末から 13 世紀初め頃で、この場所にあった封建領主の城館が取り壊された後に建てられたとも言われる。聖堂自体はこの地方のロマネスク後期に属するが、ゴシック様式で作られた部分も混在している。さらに後の時代に修復の手が幾度も加えられている。

西ファサードは、上部が切妻形となっており、中央下部には二重のモールディングで縁取られた半円頭形の扉口 (15 世紀) が開く。左右の側柱の基壇部分には摩耗しているがゴシック様式の彫刻が残されている。また扉口の上にはセグメンタルアーチが架かる縦長の窓と、さらにそのすぐ上に丸窓が開けられている。

墓地に面した身廊部の南側には、二重になった尖頭形の壁アーチがあり、その中に大きな出入口が開けられてい



26.3.1 Ste-Foy de Mirmande

る。そのすぐ隣にある方形の小さな建物の内部には、さらにその東隣に立つ鐘塔に登るための階段が作られている。がっしりしたこの方形の鐘塔は西ファサードと同じ 15 世紀のものである（1 辺約 6 メートル）。壁面は不整形の小石材が不規則に積まれているが、角石には整形された中石材が並べられている。南面の下にはロマネスク様式で半円頭形の窓が開けられている。また中程のところに半円頭形の細長い窓が、さらにそれより上の方に小さな方形の窓が開けられている。最上部は近代に入ってから再建されたもので、半円頭形のベイが 2 つ一組となった開口部が 4 つの面すべてに開けられている。鐘塔の東隣には、身廊部よりも少し背の低い礼拝室がある。15 世紀後半あるいは 16 世紀初め頃に増築されたもので、その南壁には大きな半円頭形の窓が開けられている。この礼拝室のさらに東側には近代になって付け加えられた背の低い建物（聖具室）が並んでいる。身廊の北壁は不整形の小石材が積まれて作られているが（とりわけ壁面の上の方）、開口部などは見られない。身廊の南北の外壁には扶壁などは付けられていない。

身廊東側の、いわゆる後陣は平面形である。上下 2 段となっており、下段の向かって右側や切妻となった最上部を除いて、整形された切石がきっちりと積まれた壁面である。身廊部の石積みとの違いから、この後陣の壁が最も古く、12 世紀にまでさかのぼるものと思われる。後陣の上段中央にはモールディングで縁取りされ、外側に向けて隅切りされた半円頭形の大きな窓が、そしてそのすぐ上には、西ファサードと同じように丸窓が開けられている。

聖堂内部は単身廊形式で、大きな身廊の南側に鐘塔と礼拝室が接続する。身廊は 3 ベイからなるが、その平面プランは正確な長方形ではなく、わずかに平行四辺形となっている。天井は中央のベイが半円筒形ヴォールトであるが、3 つのベイを区切る 2 つの横断アーチのうち、東側のものは尖頭アーチ、西側のものは半円形である。ヴォールトおよび横断アーチの起拱点には身廊南北に水平にコーニスが付けられている。西側のベイの天井は 20 世紀前半には崩落してしまっていたが、修復工事によって現在は木造で再建されている。

身廊東側のベイ（内陣）の天井は 4 分交差リブ・ヴォールトで、13 世紀終わりから 14 世紀初め頃のものと考えられる。リブ自体は赤く彩色されている。このリブの交差部分の丸い要石（キーストーン）には「神の子羊」が彫刻されている。リブはベイの 4 隅において、柱頭を伴った短い円柱（キュ・ドウ・ランプ／cul de lampe）が受け止める。柱頭はパルメットなどの植物文様、円柱の下部は人面や広げられた手である。文字通りリブを手で受け止めているわけである。

内陣のベイの東壁（つまり後陣の壁）には、半円頭形で縦長の窓が開けられているが、その下半分は埋められている。またその窓の上には丸窓が開けられている。このベイの北側の壁は水平のコーニスを境にして２段構えとなっていて、下半分の壁面には、横長のセグメンタルアーチが架かるその内側東寄りの所に、半円頭形のニッチが付けられている。また上の段には、水平のコーニスのすぐ上に、内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形で縦長の窓が開けられている。一方、この内陣のベイの南側には、先にも触れたように、１５世紀後半あるいは１６世紀初め頃に礼拝室が増築されており、その平面プランは方形で、天井にはやはり４分交差リブ・ヴォールトが架かる。その南壁には半円頭形の大きな窓が開けられている。この礼拝室と身廊の内陣の間には、かつては北側の壁面と同じような整形された切石を並べた横長のセグメンタルアーチが付けられていたが、それを取り壊して尖頭形のアーチを作り、さらにそれを埋めて平たい石を荒く並べたセグメンタルアーチを架け直している。そのすぐ上にも半円頭形の大きな窓が開けられていたが、現在は埋められている。その窓はアーチ部分は二重のモールディングに、また窓の両側は植物文様の彫刻が施された柱頭を持つ小円柱によって縁取られている。

東から２番目の（つまり身廊部の中央の）ベイの南側には方形の鐘塔が立ち上がるが、鐘塔の１階部分はやはり一種の礼拝室となっており、西側にある出入口は鐘塔の上に登るための階段に通じている。この礼拝室の南壁には隅切りされた半円頭形の細長いロマネスクの窓が開けられている。天井はリブのない交差ヴォールトで、赤く彩色されている。鐘塔と身廊の間には、非常に量塊感のある尖頭アーチが架けられている。この尖頭アーチと１５世紀の礼拝室の間（横断アーチを受け止める方形のピラストルのすぐ西隣）には、半円アーチが架かる縦長の出入口の跡が残されている。東側の礼拝室が増築された際に埋められたものであるが、かつての小修道院の建物に通じていたと思われる。

サント＝フォワ教会の建物は、現在はミルマンズのコミュニオンが所有し、地元の芸術家の展覧会など、さまざまな文化イベントの開催のために使用されている。

Bibliographie :

Barruol (1992) p.325; Carlier et F. Morin (1989) p.43; Peyrard (1976) pp. 119-120; *SAF*, 1983-3, pp.209-211; RIP.

26.3.2 グラス／旧ノートル＝ダム・ダンデアック小修道院

(Ancien prieuré Notre-Dame d'Andéac, Grane) privé

グラスは、クレからドローーム川を渡って県道 D104 を西へおよそ 10 キロで、ローヌ川まではおよそ 15 キロである。県道 D104 と D125 が交わる大きなロータリーから D104 をさらに西へ 650 メートル進むと、その県道の北側に旧ノートル＝ダム・ダンデアック（またはノートル＝ダム・ダンデア）小修道院がある。創建は 11 世紀末から 12 世紀初め頃のこととされる。中世の間はオーヴェルニュのラ・シェーズ・デュ修道院に付属していた。大革命の後は農家がい取り、倉庫や家畜小屋など農場の施設として使用していたが、近年はうち捨てられたまま荒れ放題となっている。2020 年の時点では、土地と建物の所有者はいるのであろうが、使用されている気配はまったくない。

付属教会は、敷地の北側に、後陣が東を向く形で建てられている。3 ベイからなる身廊にトランセプトと主後陣が続く。主後陣は外側は五角形で各面の角部分には方形の扶壁が付けられている。東端（中央）の面には、かつて開けられていたロマネスク様式の窓を取り壊して、その壁面いっぱいに広がる大きな出入口が開けられている。農機具や荷車などを通すためのものであったのだろう。凱旋アーチ壁には隅切りされた小さな丸窓が開けられている。その両側の面には半円頭形で隅切りされたロマネスク様式の窓が残されている。主後陣の左右（南北）はトランセプト（翼廊）であるが、外側は平面形で内部はそれぞれ半円形の小後陣である。それぞれの東側の壁にはやはり半円頭形で隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。

南側トランセプトの西壁には、半円頭形の扉口が開けられている。半円アーチの内側にはタンパンを縁取るようにして歯車文様のヴシュールがあり、そのタンパンにはギリシア十字が彫刻されている（ただし摩耗が進んでいる）。身廊の南側には方形の扶壁が付けられており、その扶壁をはさんで向かって右側の壁面には、半円頭形で隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。また向かって左側には身廊の 2 階部分（19 世紀）に入るための出入口と階段が作られている。この身廊の外壁の上部にはさまざまな彫刻が施されたモディオン



26.3.2 Grane

が並ぶ。人間や動物の顔、図形的な植物文様などである。この身廊の南側に広がるスペースは、かつてのクロワトル（内庭回廊）で、南側トランセプトのさらに南側には、かつての修道院の集会室（salle capitulaire）が接続している。その集会室のクロワトル側に作られていた半円形のアーチの連なるアーケードと、それを支えていた柱などが残されている。アーケード自体は埋められているが、柱の 1 つにパルメットの柱頭彫刻が見られる。

聖堂内部は、ここを手に入れた農家によって 2 階建てに改造されている。交差部の東側には内陣のベイと、さらに二重の凱旋アーチの先に半ドームの架かる後陣が続く。交差部および後陣は、整形された中石材がきれいに積まれたものである。交差部を含めて 3 ベイからなる身廊部の天井は、水平に延びるコーニスの上に半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かり、各ベイは半円形の横断アーチとそれを受ける壁付き円柱によって区切られている。それらの円柱の柱頭彫刻は、葉脈の筋が見事な大葉が縦に重なるものや、やはり葉脈の筋が何重にも重なる艶めかしい大葉が湾曲したりあるいは葉を広げたりするものなどである（ただしこの後者の柱頭はゴシック期以降のものと思われる）。身廊の南北の側壁には各ベイに半円形の大きな壁アーチが付けられている。

身廊の西側には、かつてそこに鐘塔が立ち上がっていた土台部分である方形の建物（clocher-porche）が残されている。この小修道院が創建された 11 世紀末頃の建設である。その壁面は不整形の小石材がラフに積まれているが、角石部分は整形された中石材がきっちりと重ねられている。西側の壁面には、整形されたクラヴォーがきれいに組まれた半円頭形の大きな扉口が開き、東側の壁には聖堂身廊部に通じる出入口が付けられている（ただしこれは今は埋められている）。この建物の 1 階部分は方形の各面に半円形の壁アーチが付けられ、天井はリブのない交差ヴォールトである。

Bibliographie :

Barruol (1992) pp.322-323; Serre (1989) p.41.

26.3.3 シャブリアン／サン＝ピエール教会（Église Saint-Pierre, Chabrillan）

シャブリアンは、クレから県道 D104 を西へおよそ 8 キロ、ローヌ川までは約 17 キロである。D104 から D537 が分かれる交差点があるので（石の十字架が立っている）、それを南に折れて 800 メートルで、小丘の上に中世の城の遺構が残るシャブリ

アン村となる。その名は羊（chèvre）を表すプロヴァンス語の« chabra »から来たとされる。12 世紀半ばには、シャブレイア家（Chabreihha）がここの領主であった。この家は他にもオティシャン（Autichamp／シャブリアンの南およそ 6 キロ）も所有していたとされる。その後はヴァランティノワ伯（ヴァランス伯）であるポワティエ家（Poitiers-Valentinois）の支配下に入る。丘の上に残る城は、もとは 10 世紀にまでさかのぼるものであるが、13 世紀のアルビジョワ十字軍の際に、シモン・ドゥ・モンフォールによって破壊された。14 世紀には城を中心として村全体が周壁で取り囲まれるが、百年戦争期の野盗化した傭兵部隊によって襲撃されたりしている。1349 年にドフィネがフランス王国に編入された後、シャブリアンの城もルイ 11 世の所有となった。同じ世紀の半ばに、シャブリアンはモルトン家（Moreton de Chabrillan）に与えられた。16 世紀後半にはプロテスタント（ユグノー）の攻撃を受けている。16 世紀半ば、ヴァランティノワが有名なディアヌ・ドゥ・ポワティエ（アンリ 2 世の愛妾）に与えられ、さらに 17 世紀にはそれをモナコ公グリマルディ家が手に入れている。シャブリアンの領主は、その頃はまだモルトン家であったが、中央政界に進出するようになり、1750 年頃にシャブリアンを離れている。その後シャブリアンの城は荒廃が進み、大革命に際しては国有財産として売却されるも、廃墟化が止まらず、今日では崩れかけた城壁と円塔の一部が残るだけである。

城のすぐ東側にはサン＝ジュリアン教会（Église Saint-Julien）がある。建設されたのは 13 世紀である。16 世紀末に宗教戦争によって大きく破壊され、17 世紀前半にいったん修復された。しかしその後も傷みと荒廃が進み、19 世紀になって大々的に拡張・修復された。南側に開く扉口にはドーリス式円柱に支えられた四角いポーチが付いているが、これも 19 世紀のものである。内部は 4 ベイの身廊に半円形の後陣が付く。身廊の両側には礼拝室が並ぶ。それらの礼拝室の 1 つには、モルトン家の墓碑銘が掲げられている。後陣には 2 ヶ所にロマネスク様式を模した半円頭形の窓が開けられ、また西端のベイには 2 階席が作られている。後陣の南側には、2 階建ての方形の鐘塔が建っている。

ロマネスクのサン＝ピエール教会は、シャブリアンの村のおよそ 800 メートル



26.3.3 St-Pierre de Chabrillan

ル東にある墓地の一角に建っている。もともとは、スー（クレの南約 15 キロ）のサン＝ティエール修道院（Abbaye Saint-Thiers de Saoû [26.3.8]）傘下の小修道院附属聖堂であった。史料の初出は 1275 年であるが、建設はトランセプトと後陣が 11 世紀後半、そして身廊部分が 12 世紀半ば頃（あるいは 12 世紀末から 13 世紀初め頃）とされる。前者が主に石灰岩の小石材、後者が砂岩の中石材というように、積み石の種類や大きさによって建設時期の違いがよく分かる。交差部の上に建つ方形の鐘楼は、土台部分は 12 世紀だが、その上の鐘楼本体はサイズを少し小さくして 19 世紀に再建されたものである。各面には鐘を吊すための半円頭形のベイが 1 つずつ開けられている。

西ファサードは上部が三角形の切妻形である。中央下部にある扉口はわずかに尖頭形となったアーチの内側に方形の扉が開く。その上には、外側に向けて大きく隅切りされた半円頭形ロマネスク様式の窓が開けられているが、下の扉口と上の窓の位置は縦軸が合致していない。切妻の頂点の軸に合っているのは上にある窓なので、扉口の方が中心よりも向かって右側にずれているのである。西ファサードの壁面は、中石材と平たい小石材が交互に積まれている。建設の際に足場を組むために開けられた小穴が 20 ヶ所ほど認められる。扉口の左右の側柱の内側には、それぞれ上部に彫刻の施された横に長い長方形の石が組み込まれているが、摩耗が激しくてその図像は判別できない。また扉口の両側には、19 世紀頃のものと思われる古い墓石（わずかに墓碑銘が読み取れる）が置かれている。

身廊の南の側壁にはやはり足場を組むための小穴がいくつか開けられている。またトランセプト（南側）の近くには小さな窓が上下に 2 つ開けられている。ともに外側に向けて隅切りされており、上のものは方形、下のものは半円頭形である。ただしこの下のものは埋められていて今はニッチとなっている。トランセプトの南壁には窓が開けられている。この南側トランセプトの西壁には半円アーチが架かる出入口が残されている（これも今は埋められている）。この出入口は、かつて隣接して建てられていた小修道院の建物との行き来のものであったと思われる。この南側トランセプトの南西角の高い位置には、彫刻が施された角石が組み込まれている。その南面では植物の葉



26.3.3 deux oiseaux, Chabrilan

らしきものをついばむ 2 羽の鳥が向かい合っているが、首が長いのでクジャクのようにも見える。その角石の西面には、やはり向かい合う 2 頭の四足獣が彫刻されているが、傷みが進んでいて大まかな輪郭だけが見て取れるに過ぎない。

身廊の北の側壁にも足場を組むための小穴がいくつか開けられているが、窓などの開口部は見られない。身廊とトランセプトの間に高さのある方形の小塔が立つ。その中には鐘楼に登るための螺旋階段が作られている。螺旋階段への入口は聖堂の中に開けられている。また北側のトランセプトの北壁下部には方形のニッチが付けられている。

後陣には半円形の主後陣と、その左右にトランセプトに付けられた半円形の小後陣が並ぶ。その様子は、典型的な南フランスのロマネスク様式である。壁面は不整形の小石材が積まれており、11 世紀後半のものとされる。主後陣中央には、隅切りされた縦に長い半円頭形の窓が開けられている。小後陣には、主後陣のものよりも低い位置に、やはり隅切りされた半円頭形の窓が付けられている。

聖堂内部の身廊は 3 ベイからなる。12 世紀半ばから後半にかけて建設された。天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトで、各ベイを区切る横断アーチはわずかに尖頭形となっている。西側の 2 つの横断アーチはインポストを介して方形のピラストル（壁付き方形柱）が受けるが、交差部との境に架かる横断アーチは柱頭を持つ壁付き円柱が受け止める。しかもその円柱は途中までで、床面までは下りていない。

交差部は、二重になった半円アーチを境にして身廊・主後陣・南北トランセプトと接する。それらのアーチは柱頭を持つ円柱が受け止めている。交差部の上には四隅のトロンプの上にクーポール（ドーム）が載る。その中央には丸い穴が開いていて、かつては鐘楼の鐘を鳴らすためのロープが通されていた。主後陣は半円形で、左右の方形の側柱と、柱頭を持つ 4 本の小円柱が並び、その上に小さな半円アーチが並ぶアーケードとなっている。後陣の上には半ドームが架かる。南北の小後陣も半ドームが架かるが、主後陣のようなアーケード装飾は見られない。主後陣に開けられた縦長の半円頭形の窓は、そのアーケードの中央にあってそれを中断する形で上に突き出している。こうした仕様は、シャブリアン近くでは、例えばクレの東約 8 キロにあるピエグロ＝ラ＝クラストルのノートル＝ダム教会（Notre-Dame de Piégros-la-Clastre [26.3.6a]）の後陣にも見られるものである。

ここシャブリアンのサン＝ピエール教会で注目すべきは、後陣および交差部の柱に付けられている浅浮き彫りの柱頭彫刻である。後陣のアーケードに 4 つ、交差部に 6 つある。前者が 11 世紀終わり頃、後者は 12 世紀初め頃のものとされている。後陣の

ものは、植物や動物が彫刻されている逆台形状の冠板を持ち、うねるような組紐文様や植物のツルの上に、不思議な人面や四足獣、そして鳥（ワシ）などが彫刻されている。後陣の向かって一番左側のものは、植物のツルを吐き出す人面が四足獣にはさまれている。下には 3 条線の組紐がグルグルと渦を巻いている。左から 2 番目のものも、中央にツルを左右に吐き出す人面があり、柱頭の角部分にはワシ（右）と羊（左）がいる。人面の下は大きく湾曲するパルメットで、上の冠板は 3 条線からなる組紐の連続である。3 番目のものは今度は中央に牛の頭がある（角が生えている）。その左側にはひねり状の木の幹を斧で削るようなポーズを取る人物がいる。右側にはイヌに追いかけるようにして足の長い四足獣（鹿か）がいて、その先にはベビがいる。この柱頭の下部分は 4 条線からなる組紐が絡まるようにカーヴを描いている。また冠板は 2 条線からなる形の崩れた組紐文様である。後陣の一番右側の柱頭には、上下 3 段に重なった大葉（あるいは図形化されたアカンサスの葉）の列と捻り紐文様、そして冠板には 2 条線の組紐文様と四足獣などが彫刻されている。

交差部では、南北のトランセプト（翼廊）との境に架かるアーチを左右で受け止める 4 つの柱頭と、身廊の東端のベイとの境にあるアーチを左右で受け止める 2 つの柱頭がある。北のトランセプトとの境にあるアーチを受け止めるもののうち、後陣に近い東側の柱頭には、2 匹の四足獣（顔が猫のようにも見える）が向かい合い、その上には聖アンデレの十字架の形をした円環からパルメットが四方に広がっている様子が見られる。冠板は無彫刻である。身廊に近い西側の柱頭には、渦を巻く 3 条線の組紐の上に 2 匹の四足動物が向かい合い、その上と柱頭の角の部分には大きく広げられたパルメットの葉が彫刻されている。左側面には大きな丸い渦巻きと、その下に牛がいる。

南のトランセプトと交差部の境にあるアーチを受け止める柱頭は、後陣に近い東側のものには、水平に延びる 3 条線の組紐の上に松ぼっくりが置かれ、その上にはお互いに反対方向を向いた牛らしき四足動物がいる。柱頭の左右の角部分には大きな翼を持つワシがいる。冠板は無装飾である。この柱頭と向かい合うようにして配置された身廊に近い西側の柱頭には、真っ直ぐに立ち上がる太い茎が 5 本並び、それぞれの茎からは左右両側に広がる葉脈の列が、まるであばら骨のように下から上へと並べられている。それらの茎の上には小さな渦巻きが置かれている。冠板はやはり無装飾である。

交差部と身廊の間に架かるアーチを受け止める円柱の柱頭は、北側のものは松ぼっくりをはさんで左右の角部分にワシがいる。松ぼっくりの上には大きく広がるパルメ

ットの葉が彫刻されている。冠板は無装飾である。それと向かい合う南側円柱の柱頭彫刻は、後陣と交差部にあるこれらの柱頭彫刻の中でも、最も注目すべきものであろう。そのテーマは「生命の木」（*arbre de vie*）である。柱頭下部のアストラガルから、ぐるぐると捻られた幹が真っ直ぐに立ち上がり、柱頭上部で「Y」の字形に枝が分かれ、パルメット様の葉を左右に大きく広げる。その木の真上には小さな円形花紋が置かれている。柱頭の向かって右側の角部分には半円形アーチとそれを受け止める左右の



26.3.3 *arbre de vie*, Chabریان

柱の中に、右手を上に掲げ上げた小さな人物が立っている。そのアーチの上には、あたかも後の時代のフランス王家の百合の紋章のような形をしたパルメットの大きな葉が上に向けて伸びている（ただし摩耗が進んでいる）。一方この柱頭の左側の角には、大きな松ぼっくりのような実が置かれ、その上にはやはり百合の紋章のようなパルメットの葉が伸びている（こちらははっきりと残っている）。冠板は無装飾である。

シャブリアンサン＝ピエール教会に見られる以上のような柱頭彫刻においては、説話的なものがほとんどなく、それらに解釈を施すことは難しい。11世紀末から12世紀初め頃の初期ロマネスク世界を彩る表象が、カロリング時代あるいはさらにその前の初期キリスト教時代の遠い記憶を彷彿とさせつつ、純粹に見る者の目を楽しませてくれる。この聖堂は18世紀前半にあやうく取り壊されそうになったらしいが、シャブリアンの住民たちの反対で保存された。大革命の嵐も乗り越え、貴重な歴史的・文化的遺産として今日にまで至っているのは、誠に幸いなことであると言わなければならないであろう。

Bibliographie :

Barruol (1992) pp.287-293, pp.348-354; Bornecque (2002) p.39; Da Costa (2000b) p.35; Desaye (1970) pp.3-7; Desaye (1989a) p.42; Morel (2007) pp.48-49; Thirion (1988) pp.111-135; RIP.

26.3.4 オティシャン／サン＝セバスティアン教会鐘塔

(Ancien clocher de l'Église Saint-Sébastien, Autichamp)

オティシャンは、クレから県道 D538 と D26、そして D591 を通って南へおよそ 9 キロの高台の上にある小さな村である。この地は中世の間はヴァランティノワ伯領内にあって、シャブリアンの領主が所有・支配した。ルネサンス期になって領主がボーモン家になり、それまでの古い城館もルネサンス様式のものに改築された。大革命の後に廃墟化するが、1980 年代から修復が進み今日に至っている（現在は個人所有）。この城館は村の中心の最も高いところに建っており、その敷地の南側には今も円塔が残っている。

オティシャンの教会の遺構である鐘塔は城館のすぐ南に位置する。13 世紀に建設されたもので、大革命まではヴァランス司教区に属し、この地がシャブリアンの領主の支配下にあった時期には、同じくシャブリアンの教会の管理下にあった。もともとはサン＝ジャン教会と呼ばれていたが、17 世紀頃にサン＝セバスティアン教会と名を変えた。しかしその頃にはすでに荒廃が始まり、18 世紀に廃墟化したようである。このサン＝セバスティアン教会に代わって、18 世紀後半には城館の西隣に新たにサン＝ジャン＝バティスト教会が建設された。古いサン＝セバスティアン教会の方は、身廊部などは完全に取壊され、今はその方形の鐘塔のみが残されている。建設は 13 世紀後半頃とされるが、部分的にロマネスクの要素が残されている。東面の一番下に半円頭形の大きな出入口が開けられており、そのアーチ部分は 3 重のモールディングに縁取られている。内部は交差ヴォールトの架かる小さな空間である。

鐘塔の外壁は 2 つの水平のコーニスによって 3 段構えとなっている。一番上の鐘塔最上部の東西および南面には、ロマネスク様式の半円頭形のベイが 1 つずつ開けられており、北面のみそれが 2 つ開けられている。またこの鐘塔上段の角には古いガーグイユ（水落とし）が残されている。一番上には円錐形の尖塔が立っている。この鐘塔は最近では 2021-2022 年に修復工事が行われ、今でもその鐘の音が村の住民たちの生活のリズムを刻んでいる。

この鐘塔のすぐ北側には、18 世紀後半に建てられたサン＝ジャン＝バティスト教会がある。扉口の開くファサード（小さな鐘楼が立つ）は南を、五角形



26.3.4 Autichamp

の後陣は北を向いている。この後陣には窓などはない。内部は2ベイからなる身廊、東西を向いたトランセプト、そしてやはり内部も五角形となった後陣（内陣）から構成されている。近年になって壁面や内装などに傷みが見られたが、2014-2015年に大々的に修復工事が行われてきれいな状態を取り戻している。

Bibliographie :

Brun-Durand (1891) p.15; RIP.

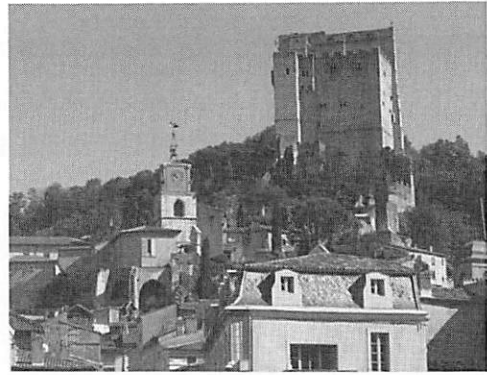
26.3.5 クレ／城塔とサント=カトリーヌ礼拝堂

(La Tour de Crest et Chapelle Sainte-Catherine, Crest)

クレの街は、ディー (Die) からローヌ川まで流れるドローム川沿いにある人口およそ 8700 の地方小都市である。ディーからは県道 D93 で約 38 キロ、ローヌ川までは県道 D104 で約 25 キロである。ヴァランスとモンテリマルのほぼ中ほどに位置する。ディー方面からローヌに出るルートを押さえる交通の要所であり、軍事的にも重要な拠点であったことから、12 世紀以降、大規模な城塞が建設され、15 世紀まで拡張が続いた。クレをめぐるのはヴァランティノワ伯（ポワティエ家）とディー司教がその支配権をめぐる争ったことでも知られる。異端カタリ派に対するアルビジョワ十字軍の南仏遠征の際には、1217 年にシモン・ドゥ・モンフォールがクレを攻囲している。1419 年にはドフィネが王領に編入されるが、17 世紀半ばにクレの街と城は、ヴァランティノワ公となったモナコのグリマルディ家の所有となった。国王ルイ 13 世は 1627 年にクレの城塞の破壊を命じているが、城塔部分は破壊を免れ、19 世紀まで監獄として使用された。現在はクレのコミューンの所有となっている。

クレの街には、ロマネスク期の聖堂で現存するものはない。11 世紀にはロマネスク様式のサント=マリー教会が旧市街から現在城塔が建つ岩場に登る途中あたりに建てられていた。しかし 16 世紀の宗教戦争の際に破壊されて今はない。この有名なクレの城塔 (Tour de Crest) は、東西 32 メートル、南北 28 メートルで、最も高い部分は 52 メートルである。これはフランスで最も高いもので、遠くからでもよく見える。この塔は 12 世紀から 15 世紀までのさまざまな時代の建築部分が組み合わされている。北西端の五角形の最も古い部分 (Tour vieille) は 12 世紀後半から 13 世紀初め頃 (ロマネスク後期) にかけてのものである。城塔の北側には、やはり古いサン=タン Dre 教会があったが、宗教戦争の際に破壊されて消滅した。

城塔の五角形の古い部分の南側に接する塔本体の4階部分 (3ème étage) の前室 (vestibule) は、15世紀にはサント=カトリーヌ礼拝堂として使用されていた。これは17世紀以降、この塔が監獄として使用されていた時代に収監者のために用いられていたものである。ただし、現在はそれが聖堂であったことを思わせるものは何も残っていない。



26.3.5 Crest

クレには、街の中心にサン=ソヴール教会 (Église Saint-Sauveur) がある。19世紀の新古典主義様式で建てられている。もともとは12世紀に建設されたロマネスク聖堂であったが、宗教戦争の際にヴォールトなどが破壊され、1594年にいったん修復されるが、1836年に倒壊し、その後に南北方向を向く形で再建が始まり1847年に完成した。古い聖堂に付けられていた木製の扉とタンパンの2枚の板は、現在は城塔の2階に保存・展示されている。サン=ソヴールの南ファサードは三角形のペディメントを4本のイオニア様式の円柱が支えている。内部においても同様の柱が並んで身廊と側廊を隔てている。交差部にはクーポールが載り、半円形の後陣には雲の中に手を広げて光を放つ神の彩色された彫刻が見られる。東西のトランセプトも半円形なので、サン=ソヴールの平面プランは三つ葉形である。後陣の東側には方形の鐘塔が立っている。

サン=ソヴール教会から西に50メートルほど行くと、北に登る124段の長い石段 (Escalier des Cordeliers) がある。ヴァランティノワ伯によって16世紀後半に作られたものとされる。その石段を登ると、城塔の建つ高台に至る道の途中にコルドゥリエ礼拝堂 (Chapelle des Cordeliers) が建っている。コルドゥリエは「小さき兄弟会」(フランシスコ会) の別名である。この礼拝堂は12世紀のロマネスク聖堂の跡に、1571年に建てられたものである。大革命の後には三位一体信心会が女子のための学校を運営するが、1864年には孤児院となった。1977年にクレの歴史友の会が購入し、修復などが行われて、現在は展示会その他の文化イベントに利用されている。2ペイの身廊に五角形の内陣が付く。身廊のペイには4分交差リブ・ヴォールト、内陣の天井には7本のリブが架けられている。この身廊と内陣を取り囲むように、建物外側の通路にも4分交差リブ・ヴォールトが架かる天井が連続して作られている。南側にあ

たる後陣中央には半円頭形の大きな扉口が付けられ、その頂部にはマルタ十字の紋章が掲げられている。身廊北側のベイの西側にも方形の扉口がある。身廊の西側には方形の塔が立ち、各面には丸い時計が付けられている。

Bibliographie :

Barruol (1992) p.397; Bois et Burgard (2007) pp.24-25; Huot et Alcamo (1995) pp. 69-90; Huot et Serre (2005) pp.3-70; Mailhet (1900) pp.19-52, pp.199-232; De la Torre (1992) p.25; GV; RIP.

26.3.6a ピエグロ=ラ=クラストル／ノートル=ダム教会

(Église Notre-Dame, Piégros-la-Clastre)

ピエグロ=ラ=クラストルのコミューン域は、北はドローム川を境とし、南はスー (Saoû) との境に東西 13 キロにわたって延びる長い山脈「フォレ・ドゥ・スー」(Forêt de Saoû) の北縁にそびえるパ・クール (Pas Court) の尾根にまで至り、その広さは 24.76 平方キロである。ドローム川の河岸平野にあるラ・クラストル地域と、封建時代の城の残る標高の高いピエグロ (およびサン=メダール) 地域に大きく分けられる。現在のコミューンの役場はラ・クラストルの村にある。クレからこの村役場までは県道 D164 で東へおよそ 7 キロ進み、さらに D164 から D738 に入って南へ 1.5 キロである。

ラ・クラストルのノートル=ダム教会 (より正確には聖母被昇天教会／Église Notre-Dame de l'Assomption) は、この村役場の 50 メートルほど北にある。もともとは 11 世紀終わり頃あるいは 12 世紀初め頃に、聖アウグスティヌス戒律を遵守することで聖堂参事会改革を進めようとする律修参事会によって、ここから南に 5 キロ、標高約 800 メートルの山の中にサン=メダール修道院 [26.3.6b] が創建されたのが始まりである。その後ほどなくして (あるいはほとんど同時期に) 修道士たちはドローム川に近い平地にあるラ・クラストルにも修道院と聖堂を建てた。聖堂の最初の名前は母院の名前と同じくサン=メダール教会であった。史料にその名が最初に現れるのは 1165 年である (教皇アレクサンデル 3 世の教書)。彼らは夏は標高の高いサン=メダールの本院に、そして寒さが厳しい冬の間はラ・クラストルに滞在したと言われている。

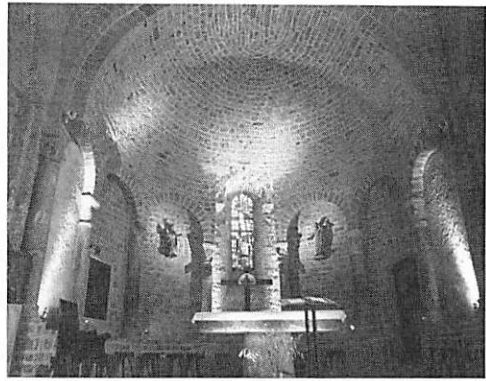
1277 年頃、ラ・クラストルの修道院と聖堂はサン=リュフ修道会 (Ordre de Saint-Ruf) のものとなる。同じ頃、ヴァランティノワ伯とディー司教の対立に巻き込まれた

こともあって、聖堂には若干の要塞化の手が加えられた。その後 1304 年には、今度は聖アントニウス会（病院修道会）のコマンドリーとなった（高地にあったサン＝メダールは 16 世紀には隠修所となる）。ラ・クラストルの聖堂は宗教戦争期に大きな被害を受けるが、1631 年に修復工事が行われている。フランス革命の後は一時的に農家が所有し、倉庫などとして使用した。教区教会の役割は、古くからピエグロの城にあったサン＝タンダレ教会（Église castrale Saint-André）が担っていたが、19 世紀になるとその役割を、新たにノートル＝ダムの名前を冠することとなったラ・クラストルの聖堂が引き継いだ（サン＝タンダレ教会は現在は壁面の壁の一部分が残るのみ。城は個人所有のために見学不可）。1857/1858-1862 年には身廊が拡張されている。さらに 1965/1868-1871 年にはファルコネ司祭の主導によって大々的な修復工事が行われた。また 20 世紀半ばにも修復の手が加えられ、今日に至っている。

ノートル＝ダム教会の外観は、住宅の建物が隣接し（とりわけ南側と東側）、さらに 19 世紀以降の修復工事によって外壁が漆喰で塗り固められていることもあって、あまり古さを感じさせるものとはなっていない。上部が切妻形となった西ファサードには、外側に向けて隅切りされ、円筒形のモールディングによって縁取りされた扉口が開く。その扉口の上に架かるアーチの頂部には小さな十字架が据えられており、さらにその上には丸窓が開けられている。ただしこのファサードは 19 世紀に身廊西側のペイを増築する際に作り直されたものである。身廊部の南北側壁には外側に向けて隅切りされた半円頭形の窓が 2 つずつ開けられている。それぞれ西側のものは 19 世紀のものである。身廊北側の外壁には東寄りの所、すなわち東側のペイの両端部分に、末広がりの太い扶壁が付けられている。同様の扶壁は身廊の南側の外壁にもあるが、直接住宅が建てられていて見ることができない。後陣は半円形であるが、左右両側を別の建物（南側のそれは聖具室）に挟まれていて、見ることができるのは東端の窓（半円頭形の大きなもの）が開くわずかな部分だけである。東端のペイの上は、そこから西側よりも建物が高く、さらにその上には、宗教戦争によって破壊された後で近代になって再建された小さな鐘楼が立っている。

聖堂内部は単身廊形式で、3 つのペイの東側に半円形の後陣が続く。身廊の一番西側のペイは 19 世紀に増築されたもので、2 階席が作られている。天井は一番西側のペイから一番東側のペイ（内陣のペイ）まで順次高くなっていく。西側 2 つのペイのヴォールトは半円形ではなくライズの小さな（高さが低い）形となっている。この 2 つのペイの南北の側壁には、水平のコーニスの下に半円形の壁アーチが付けられている（ただしアーチの高さがわずかに異なる）。西から 2 つ目のペイの南壁には壁アーチ

の中に、隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。身廊の3つのベイの間にはそれを区切る半円形の横断アーチが2つ架けられているが、東側のそれは白と黒のクラヴォーが交互に組まれている。H. Desaye はそれをヴレイ（Velay）あるいはローヌ中流域地方からの影響ではないかと推測している（典型的にはル・ピュイ大聖堂に見られる）。なおこの横断アーチの西側のベ



26.3.6a Piégros-la-Clastre

イは、ロマネスク期のものではあるが、東側の内陣のベイおよび後陣部分よりも建設年代が少し新しいものであると思われる。

身廊の一番東側のベイは、ラ・クラストルでは「内陣のベイ」（travée du chœur）と呼ばれる。後陣部と共に、東西軸が西側2つのベイからわずかに南側に傾いている。特徴的なのはその高さである。西側のベイおよび後陣よりもひときわヴォールトが高く、ヴォールトの起拱点に水平に付けられたコーニスの位置も、西側のベイよりも高い。そしてそのヴォールトの東西両側には、コーニスの上に横幅のある一種の横断アーチ（しかもその起拱点の位置が南北でわずかに異なる）が架けられている。このベイの南側の壁には半円形の大きな壁アーチの内側に、内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形でロマネスク様式の窓が開き、さらにその下には高さのある半円頭形の出入口が付けられている。かつて隣接していた修道院の建物との間を行き来するためのものであったと思われる。なお後陣の南側には聖具室に通じる扉が付けられている。

整形されたクラヴォーがきっちり組まれた二重の凱旋アーチ（その上には方形の開口部がある）から東には、半ドームが架けられた半円形の後陣が続く。その壁面は、6つの半円形の小さなアーチを、基壇の上に立つ6本の壁付き円柱が支えるアーケードとなっている（ただし両端の半円アーチは19世紀のもの）。後陣中央には左右のアーケードよりも高い位置まで開けられた半円頭形の隅切りされた窓がある（内壁の開口部はわずかに馬蹄形）。ロマネスク期以降の時代に開けられたもので、それによってもともとそこにあった小アーチが1つ失われている。なお後陣のこうした仕様は、シャブリアンのサン＝ピエール教会〔6.3.3〕のものとよく似ている。

後陣の外側の凱旋アーチも同様に壁付き円柱が支えている。合わせて8本のこれらの円柱は、それぞれ彫刻の施された柱頭を介して小アーチを受け止めているのである。

が、これら 8 つの柱頭彫刻こそは、ラ・クラストルにおいて最も注目すべきものであると言えるであろう。この聖堂が最初に建設された 11 世紀終わりあるいは 12 世紀初め頃のもので、カロリング期の遠い記憶をとどめるものでもある。

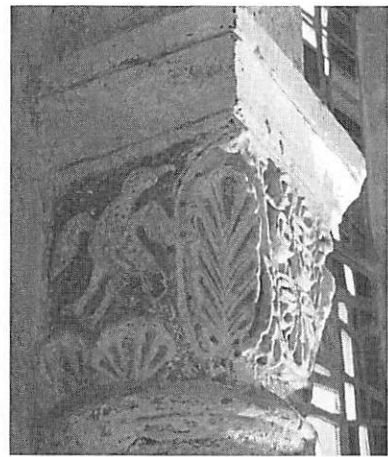
後陣の向かって左端のもの、すなわち凱旋アーチを受け止める円柱の柱頭彫刻においては、角部に左右に羽を広げる丸い顔をした天使がいる。左手を自分の胸に、また右手を腹部に置いている。天使の両側には鳥がいる。その反対側の後陣の向かって右側の凱旋アーチを受け止める円柱の柱頭彫刻もやはり羽を大きく広げる天使である。天使は両腕を腰のベルトに置いている。またこの天使の柱頭には鳥はおらず、パルメットが彫刻されている。後陣の入口にあたる凱旋アーチの左右にこのように天使を配置することによって、2 人の天使が聖堂の一番奥の聖所を守っているという形になっているわけである。なおこの 2 つの柱頭彫刻には赤い彩色がよく残っている。

後陣の向かって左から 2 番目のものは、1 本線からなる組紐がカゴ状に編まれた文様であるが（その上には湾曲したパルメットのツルがある）、柱頭の左右の角には目を剥いた不思議な人面が彫刻されている。特に向かって右側の角の人面は、人間離れた表情である。

左から 3 番目の柱頭は、向かって右側が損壊してしまっているが、角には葉脈の太い大きな葉（図形化されたアカンサス）があり、その左側にはパルメットが彫刻されている。

その次の左から 4 番目の柱頭（写真）にも、角には葉脈の太い大きな葉（図形化されたアカンサス）がある。ただし正面には 2 条線によって 4 つの渦を巻く四角い組紐文様（上）と、パルメット（下）が彫刻されている。向かって左側の面にはクチバシの鋭い鳥（ワシであろうか）、右側の面にはたわわに実るブドウの彫刻がある。またこの柱頭には小穴（trépan）がいくつも開けられている。

左から 5 番目（右から 4 番目。中央の窓の向かってすぐ右側）の柱頭彫刻は、葉脈の太いパルメット状の大葉の上に、ヴォリュート（渦巻き）に挟まれて人面がこちらを見つめている。その左右両側の面には同じく大葉とヴォリュートに囲まれてヒナギク様の丸い花卉が彫刻され



26.3.6a

chapiteau de Piégros-la-Clastre

ている。この柱頭においても小穴（trépan）がいくつも開けられているのが認められる。

左から 6 番目（右から 3 番目）のものは、パルメットが角部において大きく広がり、また各面においてもそれが空間を埋めている。そしてこの柱頭にも小穴が多数開けられている。

左から 7 番目（右から 2 番目）のものも、その左隣のものと同じくパルメット文様であるが、中央にはヒナギクの丸い花卉が置かれている。

柱頭にある彫刻と同時期のものではないが、後陣中央の窓を縁取る半円アーチを左右両端で受け止める形ではめ込まれたものもある。向かって左側のものは目を見開いたヒゲのある人面、また右側のものは、植物の葉や茎とその中にいるトカゲである。聖堂装飾にトカゲが現れるのは大変に珍しいと言える。

Bibliographie :

Barruol (1992) pp.400-401; Brun-Durand (1891) p.269; Desaye (1976b) pp.71-77; Desaye (1989b) p.68; *S&A*, 1994.7, pp.149-150; GV (par H. Desaye) ; RIP.

26.3.6b ピエグロ=ラ=クラストル／サン=メダール修道院

(Monastère Saint-Medard, Piégros-la-Clastre) 遺構▲

サン=メダール修道院の遺構は、ピエグロ=ラ=クラストルのコミュニンの南端にそびえるパ・クール（Pas Court）と呼ばれる標高 800 メートルを越える尾根のすぐ北側にある。「フォレ・ドゥ・スー」（Forêt de Saoû）の北端にあたる。ラ・クラストルの村からは、南に 2.5 キロ行くとピエグロの城（個人所有）があり、その城からさらに南東へ 1.5 キロのところに、18 世紀に建てられた小さなノートル=ダム=ドゥ=ボン=スクール礼拝堂（Chapelle Notre-Dame-de-Bon-Secours）がある。そこからはランドネ（高地ハイカー）用の登山ルートとなる。1.7 キロほど登ると古い修道院の遺構に到達する。

11 世紀終わり頃あるいは 12 世紀初め頃に、聖アウグスティヌス戒律を遵守する律修参事会によって創建された。1165 年の教皇アレクサンデル 3 世の教書にその名が現れる。この修道会は、その後ほどなくして（あるいは同時期に）平地のラ・クラストルに同名のサン=メダール教会（後のノートル=ダム教会 [26.3.6a]）を建設し、冬の間はこのラ・クラストルの方に滞在した。1277 年頃には平地のラ・クラストルの修道院とともにサン=リュフ修道会（Ordre de Saint-Ruf）のものとなり、1304 年には、

時の教皇ベネディクトゥス 11 世（在位 1303-1304 年）によって、今度は聖アントニウス会（病院修道会）に与えられた。この修道会はサン＝メダルをハンセン病患者などの病人の収容施設として使用したとされる。16 世紀になると、修道士たちが高地のこの修道院を去ったことで、人影少ないエルミタージュ（隠修所）となった。17 世紀初めにはわずかに 2 人の隠修士がいたようだが、その後は完全に放棄され廃墟と化した。

サン＝メダル修道院の建物は、2 ベイからなる単身廊形式で、後陣は 7 角形（7 面）であった。水平のコーニスの上に半ドームが架けられている。現在残る後陣の遺構には大きな穴が開いていて、いつ倒壊してもおかしくないという状態である。凱旋アーチは尖頭形である。身廊の側壁には半円形の壁アーチが付けられていた。身廊の南側には礼拝室が、また西ファサードには修道院の建物が接続していた。1988-1995 年にかけて、遺構を保存するための工事が行われている。

サン＝メダル修道院の遺構からさらに南へ向かって 100 メートルほど登ると、標高 858 メートルの尾根の上にサン＝メダル礼拝堂（Chapelle Saint-Médard）がある。ここからは 360 度の壮大なパノラマが見渡せる。この礼拝堂は、短い身廊に祭壇が置かれたただのごく小さなもので、サン＝メダル修道院によって建てられたとされるが、その建設年代はよく分らない。少なくとも現在の建物は、ロマネスク期よりはかなり後の時代のものではないかと思われる。山道を行く者のための一種の避難小屋のような役割も果たしていたらしい。また 19 世紀には少なからず巡礼も訪れた。2004 年に落雷によって大きく破損したが、翌年きれいに修復されている。

なおサン＝メダルすなわち聖メダルドゥス（Medardus／4 世紀末頃-5 世紀半ば頃）は、ノワイヨンの司教で、貧者への施しなどで知られる。農業や園芸の守護聖人でもある。ソワソンに埋葬された。パリにはセーヌ左岸に、彼に捧げられたサン＝メダル教会がある。

Bibliographie :

Brun-Durand (1874) pp.1-28; Desaye (1976b) pp.71-77; Desaye (1989b) p.69.

26.3.7 ラ・レパラ＝オリプル／レ・ロンパールのサン＝ピエール教会

(Église Saint-Pierre des Lombards, La Répara-Auriples)

ラ・レパラ＝オリプルのコミューンはドローム川左（南）岸にあって、その村役場はクレから県道 D538 と D26 を通ってまっすぐ南へ 10 キロである。ロマネスクのサン

＝ピエール教会は、その村役場の手前（北）2 キロのところで県道 D166 に入って 1.3 キロ進み、さらに D618 を 1.6 キロ南へ行ったところにあるレ・ロンバール地区（旧オリプル村）の墓地に建っている。別名サン＝ルー・エ・サン＝ピエール（Saint-Loup et Saint-Pierre）教会とも呼ばれる。

この地にあったプリウレ（小修道院）の付属聖堂である。このプリウレは、シャブリアン（クレの南約 15 キロ）のサン＝ティエール修道院（Abbaye Saint-Thiers de Saoû [26.3.8]）の傘下にあった。この場所自体はヴァランティノワ伯の領地であったが、教区としてはヴァランス司教区に所属していた。正確な建設年代は不詳であるが、シャブリアンのサン＝ピエール教会と同じく、およそ 11 世紀後半から 12 世紀半ば頃と思われる。

単身廊形式で、東端に半円形の後陣が続く。トランセプト様の側室は 19 世紀になって作られたもので、それが身廊と交わる交差部の上には、上下 2 段構えとなった方形の鐘塔が立ち上がる。下段は鐘塔を支えるために上段部分よりも南北幅があり、一種の扶壁と見るともできる。上段には各面に半円頭形の開口ベイが 1 つずつ付けられている。鐘塔の壁面は、上下段ともに、整形された中・小石材がきっちりと積まれたものとなっている。またその各壁面には足場を組むための小穴が多数開けられているのが認められる。

西ファサードは上部が三角形の切妻形で、ほんのわずかに尖頭形となった扉口が開き、その上には細長い半円頭形の窓が開けられている。この窓は内部に向けて大きく隅切りされている。身廊の外壁には南北共に方形の扶壁と、半円頭形の大きな窓が開けられている。南壁の窓は、内外において隅切りされているが、とりわけ内部に向けての隅切りが大きい。南北の外壁にはそれぞれトランセプト様の側室の西側に、さらに後代の側室が増築されている。半円形の後陣は、不整形の小石材が荒く積まれたもので、中央（東端）には、半円頭形の窓が開けられている。

聖堂内部は 2019 年に大々的に修復工事が行われ、ヴォールトや側壁などもすべて漆喰で白く塗り直されて、その様子からだけではあまり古さは感じられないものとなっている。単身廊形式で、天井は半円筒形のトンネル・ヴォ



26.3.7 La Répara-Auriples

ールトである。北側に増築された側室との間には尖頭アーチが架かる。また二重になった横断アーチの東側は内陣のベイで、同じく二重になった凱旋アーチ（小円柱が受け止める）の東側に、半円形の後陣が続く。後陣の壁面には水平のコーニスの下にキュロに受け止められた半円形の小アーチがアーケードとなって連なっている。後陣の上には半ドームが架かり、中央のロマネスク様式の窓にはステンドグラスがはめられている。

なおこのレ・ロンバールのサン＝ピエール教会からは、4 キロほど東にそびえ立つフォレ・ドゥ・スーの台地状の岩山が間近に見えるのが印象的である。

Bibliographie :

Barruol (1992) p.317; Brun-Durand (1891) p.14; RIP.

26.3.8 スー／ノートル＝ダム教会 (Église Notre-Dame, Saoû)

スー (Saoû/Saou) のコミューンは、クレから県道 D538 を南へ約 15 キロである。湾曲した向斜構造によって形成された東西 13 キロにわたって延びる長い山脈「フォレ・ドゥ・スー」(Forêt de Saoû) のおおよそ南西端に位置する。村は「ル・ロック」と呼ばれる岩山（標高 500 メートル）のすぐ西側に広がる。中世の間、この岩山の上には城が築かれていた。その名«castrum Saonis»は 1332 年に史料に現れる。宗教戦争期の 1582 年に被害を受け、1622 年になって国王ルイ 13 世の命によって取り壊された。この城のふもとには、かつてはいわゆる「鷲の巣集落」が形成されていたが、今は数軒の民家を残すのみとなっている。

一方、ヴェブル川 (La Vèbre) を隔てて反対 (北) 側の右岸には、10 世紀初め頃に聖アウグスティヌスの会則を奉ずる律修参事会によってサン＝ティエール修道院 (Abbaye Saint-Thiers) が創建され、これを中心として新たにブール (Bourg des Églises) が形成され発展した。この修道院の創建はブルグント王国のボゾンが主導したともされるが正確なことは分かっていない。いずれにせよこの修道院はローマ教皇に直属し、司教 (ヴァランス) の干渉を受けなかった。修道院長は、司教杖を持ちミトラ (司教冠) を被ることが許されていたという。周辺各地に傘下の分院を建設あるいは所有した (ミルマンド [26.3.1]、シャブリアン [26.3.4]、ラ・レパラ＝オリブル [26.3.8]、コンプスなど)。1394 年、悪名高いレーモン・ドゥ・テュレンヌ (Raymond de Turenne, 1352-1413) による略奪と破壊の被害に遭う。その際、修道院長ジャン・

ドゥ・サン＝ポールは修道士たちと共に、およそ2キロ北にあるロシュ・コロンプ（フォレ・ドゥ・スーの西端）の洞窟に逃れ、そこで7年にわたって避難生活をしたという。サン＝ティエール修道院はその後いったん再建されるが、今度は16世紀の宗教戦争で大きな被害を受けた。その争乱が落ち着いた後しばらくの間は再び修道院復興の努力が続けられるが、1602年に院外修道院長（abbé commendataire／空位俸禄修道院長または修道院外聖職者院長などとも訳される。その修道院には在住せずに聖職録のみ受け取る形ばかりの院長）となったガブリエル・ドゥ・カスタニャック（Gabriel de Castagnac）以降、修道院長はもはやこの地にはとどまらず、修道院自体も退廃の波に飲み込まれて、ついには1738年に国王ルイ14世の命によって閉鎖されてしまった。建物はそのほとんどが取り壊され、現在村の中にその遺構として残るのは、かつての修道院の周壁の塔（Beffroi）とその西側に隣接する建物の一部だけである。塔は県道D136沿いの広場に面して建っており、方形で高さがあり（内部は5階建て）、中ほどの高さのところにかつての石積みが残されている。上部には丸い時計がはめ込まれ、一番上には三角形の鐘楼が3つ連なる。今ではスーのシンボルとなっている。また村の外には、この塔から西へ550メートルほど行った県道D538の北100メートルのところに、サン＝ティエール修道院がかつて所有していた13世紀後半頃の穀物倉庫（grange）が残っている。およそ30メートル四方の大きな建物で、今は農家の建物として使用されている。

サン＝ティエール修道院が繁栄している時代にはこれを中心に形成されたブールは周壁で囲まれていたが、その中には修道院付属のサン＝ティエール教会、そしてノートル＝ダム教会とサン＝テティエンヌ教会があった。最初のものは修道士たちが使用し、あとの2つは教区教会としての役割を担っていた。現在まで残っているのはノートル＝ダム教会だけである。サン＝ティエール教会とはクロワトルで接続していた。サン＝ティエールの塔から北に50メートルの「教会広場」に面して建っている。最初に建設されたのは12世紀で、平面プランは十字形である。19世紀以降に改修された西ファサードは、上部が三角形の切妻でその頂部には十字架が据えられている。切妻の下には大きな丸窓が開けられ、扉口は尖頭形でその左右には円柱が立つ。円柱は図形化されたアカンサスが彫刻された柱頭を持ち、その上には無装飾の冠板を介して丸いクロケットを頂くピナクル（小尖塔）が載せられている。この扉口もまた19世紀以降のものである。

身廊の外壁（12世紀）は、南北ともに比較的整形された切石が積まれている。また半円頭形で隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。南側の壁面には、そ

の窓の下に水平のコーニスが残されているが、これはかつてこの聖堂の南側にあったクロワトル（回廊）の名残である。文献によれば、身廊の南西の角には彫刻の施された石が埋め込まれているとされるが、現在は金属製の雨樋が作られていてその様子をはっきりと見ることはできない。



26.3.8 Notre-Dame de Saoû

身廊北側には方形の鐘塔が立っている。4段構えになっているが、古いのは下の2段で、半円頭形の窓が上下にそれぞれ開けられている。また北側の壁面には、出張りの少ない扶壁が付けられている。鐘塔の一番上の段には、各面に2つ一組となった半円頭形のベイが開けられている。トランセプトの東側は、中央に半円形の大きな主後陣、その左右にはやはり半円形の小後陣が並ぶ。そのうち北側の小後陣のみが古い壁面を維持しているとされる。主後陣とこの北側の小後陣には半円頭形で隅切りされた大きな窓が開けられているが、南側の小後陣の開口部は小さく細長いもので、隅切りもされていない。またこの南側の小後陣の壁面は不整形の小さな石が乱積みされたものである。

聖堂内部は、近年の修復によって壁面などが漆喰できれいに上塗りされるなど、あまり古さを感じさせない。身廊は4ベイからなり、その天井は19世紀以降に架け替えられた半円筒形のトンネル・ヴォールトとなっている（ただし最も東側のベイは交差ヴォールト）。半円形の横断アーチはヴォールトの起拱点で逆三角形のキュロが受け止める。後陣は半円形で、水平のコーニスの上に半ドームが架けられ、その下側には壁付き円柱に支えられた小アーチが連なるアーケードが巡る。中央には隅切りされた半円頭形の窓が開き、ステンドグラスがはめられている。

Bibliographie :

Barruol (1992) pp.330-331; Brun-Durand (1891) p.366; Carlier et F. Morin (1989) p.41; Commune de Saoû (2011) pp.11-19, pp.49-56, p.91; Nadal (1855) pp.599-601; RIP.

26.3.9 ソワイアン／サン＝マルセル教会（Église Saint-Marcel, Soyans）

ソワイアンは、スーの西に隣接するコミューンである。クレからだと県道 D538 と D128 を南に約 13 キロ行くとタロン地区にある村役場に至る（スーからだ西へ約 5 キロ）。サン＝マルセル教会がある古いヴィラージュ（Vieux Village）は、村役場から県道 D520 をさらに南へ 1 キロである。ルビオン川の流れる溪谷を南側に、そして北側には十数軒の古い石造りの家を見下ろす南北に細長い断崖の上に、今は廃墟となったルネサンス様式の城館があり、サン＝マルセル教会も城館と並ぶようにしてその断崖の上に建っている。標高 400 メートルのここからは、東にフォレ・ドゥ・スー、南にはクストゥー山脈、そして北にはドローム溪谷までを見渡すことのできる壮大なパノラマが広がっている。

断崖の下古いヴィラージュからは、かつてここを守っていた城門（1950 年代に改修）から登る。この城門の北側に隣接する建物は、かつてのサン＝フィロメヌ礼拝堂（Chapelle Saint-Philomène）である。現在残るこの古い村の建物の多くは、サン＝フィロメヌも含めておよそ 17 世紀後半から 18 世紀後半のものである。かつてのソワイアンの村役場も 1961 年まではここにあった。城門から 200 メートルほど山道を行くと、サン＝マルセル教会に至る。

この聖堂は 12 世紀後半に建設されたとされる。サン＝マルセルすなわち聖マルケルス（Marcellus）は、5 世紀から 6 世紀初めのディーの司教で、一時期アルルおよびピレネー中部のクズランに追放されていた。ディーに戻った後は聖ヨハネ洗礼堂（ディー大聖堂の北側）などを建設した。またディーには彼の名前をつけた古代ローマ時代の城門があることでも知られる。ソワイアンのこの場所には 912 年の史料にノートル＝ダム教会の名が現れるが、サン＝マルセル教会はそれを引き継いだものと思われる。16 世紀の宗教戦争の際にはあまり被害は受けなかったとされる。17 世紀から 18 世紀にかけて、教区民の増加に伴って拡張工事が行われた。鐘塔やトランセプト様の側室などはその時期のものである。最近では 1950 年代後半に修復工事が行われ、その際には聖堂の屋根も付け替えられている。

サン＝マルセルの西ファサードはこの聖堂の中でも最も古い部分である。崖の上に建てられており、そのため基壇部分と左右両端に扶壁が付けられている。壁面は整形された小石材がきっちりと積まれている。また足場を組むための小穴がいくつも開けられている。切妻の上部には小さな半円頭形の窓が開けられている。身廊の南壁も整形された小～中石材がきれいに積まれているが、後代の修復の手が加えられており、西ファサードよりも新しい。西端の末広がりやの強固な扶壁の向かってすぐ左側には半

円形アーチの架かる扉口（19 世紀）が付けられている。この扉口の周囲の部分だけが不整形の石の乱積みとなっている。この南壁の中央に開けられている小さな窓は、隅切りはされておらず、半円頭形の頭部はモノリスである。

後陣は半円形である。その左右に大きなトランセプト様の側室が建てられているため、東側から見た建物自体の姿は非常に安定的な印象である。ただ



26.3.9 St-Marcel de Soyans

し断崖に面しているために、離れて正面からそれを見ることはできない（崖の下からなら可能である）。後陣の壁面は不整形の石が乱積みされており、南側の上に半円頭形の窓が開けられている。その頭部のアーチ部分はモノリスとなっている。なおこの後陣は 12 世紀のオリジナルのものではない。

身廊の北東角に立つ方形の鐘塔は 17 世紀から 18 世紀にかけてのものである。最上部の各面には半円頭形のベイが 1 つずつ開けられている。この鐘塔に吊されていた鐘は、1992 年にタロンにある新しい教会（村役場のすぐ南隣）に移された。

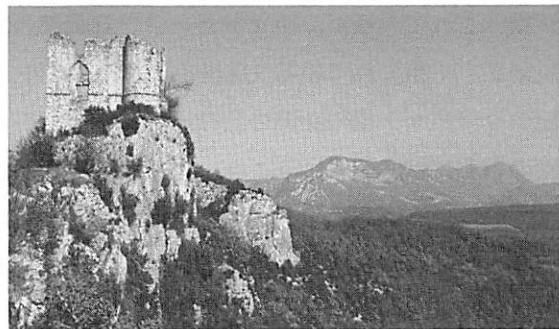
サン=マルセルの内部は 2 ベイからなる単身廊形式である。南側の側壁に付けられた 2 つの壁アーチは西側のものが半円形で、東側のものはわずかに尖頭形である。前者のアーチには扉口が開き、その上にコンソール（モディオン）が 3 つ並んでいる。2 階席を作るためのものであったのであろうか。また後者のアーチの中には内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が開く（この窓の外側は先に触れたように非常に小さい）。トランセプト様の側室は北側のものがサン=ミシェル礼拝室、南側のものがサン=バルテルミー礼拝室である。身廊と半円アーチによって隔てられた北側のサン=ミシェル礼拝室には半円頭形の窓が開けられている。ヴォールトも含めてその壁面は漆喰なども剥がれ落ちて傷みが進んでいる。南側のサン=バルテルミー礼拝室には、東側の壁に半円形のニッチがあり、さらにその隣にかつては外との行き来に使われた半円頭形の出入口の名残が残されている（今は埋められており、外側にはその痕跡すらない）。

身廊の東にはその床面より 2 段高くなった半円形の後陣が付く。後陣の南壁には内部に向けて大きく隅切りされた半円頭形の窓が開けられている。後陣の入口部分には左右に彫刻が施された石が埋め込まれている。左側のものは四足獣である（ライオン

か）。ただしこれら彫刻は摩耗がかなり進んでいる。凱旋アーチには四角い枠組みの中に丸窓が開けられている。この凱旋アーチおよび後陣に架かる半ドームには 19 世紀に彩色画が描かれている。凱旋アーチの下側には黒くて四角い葬儀用の帯状装飾が、また半ドームには雲の中で光り輝くハトとその周囲を飛ぶ天使たちが描かれている。

サン＝マルセル教会に隣接して断崖の上に残るルネサンス期の城館についても触れておこう。最初にこの場所に城塞が建設されたのは 10 世紀初めの、プロヴァンス王ルイ 3 世（盲目王、後に神聖ローマ帝国皇帝）の頃のこととされる。その後はさまざまに所有者が変わるが、15 世紀になって国王ルイ 11 世がこの城を入手し、家臣のフランソワ・ドゥール（François d'Eure）に与えたことが知られている。さらに 16 世紀初めにはサン＝ヴァリエの領主ジャン・ドゥ・ポワティエが所有した。現在の城館が建てられたのはおよそこの時期のことである。1540 年にはフランス国王アンリ 2 世の愛妾として知られるディアヌ・ドゥ・ポワティエに売却された。ディアヌは 1548 年からヴァランティノワ女公となっている。ただし、ディアヌがこの地にやって来たということはない。さらに 1616 年から大革命までの間、この地はモントーバン家（Montauban）が所有する。1622 年、国王ルイ 13 世（あるいはリシュリュー）はこの地方の城の取り壊しを命ずるが、幸運にもソワイアン（Soyans）の城はそれを免れた（スーやオリブルなどの城は破壊された）。1626 年にはレディギエール（François de Bonne de Lesdiguières, 1543-1626／ドフィネのプロテスタント指導者。後にカトリックに改宗。フランス大元帥）に攻囲されている。なお大革命までこの城を所有したモントーバン家は、1717 年にはソワイアン侯（marquis de Soyans）となっている。

ソワイアン（Soyans）の城館は、大革命後の 1793 年には今度は革命政府から破壊が命じられるが、やはりそれも免れている。しかし実際には 1790 年頃から次第に荒廃が進み、何度も略奪を受け、建物の石材なども奪われた。1796 年には放火に遭い、2 日間燃え続けたと言われる（放火犯は不詳）。その後は完全に廃墟と化した。2002 年になってソワイアン（Soyans）のコミューンのもとなり、遺構の保存整備が進められている。ただし現在は崩落の危険がある



26.3.9 Château de Soyans

ため、内部は立ち入り禁止となっている。

この城館は南北に長い「コ」の字形をしていて、北側にはメインエントランスと三角形の主塔、南側には円塔の遺構がある。西側は庭になっていた。城館外壁の2階と3階の間には水平のコーニスが巡る。建物はすべて壁面の一部が連なるだけで、そこに開けられていた窓（恐らくはルネサンス様式の四角いもの）もすべて失われている。かつてこれらの窓からは、ドローム地方の壮大なパノラマが見渡せたことであろう。城は廃墟と化したが、そのパノラマだけは今も変わらない。

Bibliographie :

Barruol (1992) p.404; Bois et Burgard (2007) p.41; Brun-Durand (1891) pp.380-381; Desaye (1976a) pp.63-65; Vincent (1864) pp.5-47; RIP.

26.3.10 フランシオン=シュル=ルピオン／サン=ピエール教会

(Église Saint-Pierre, Francillon-sur-Roubion)

フランシオン=シュル=ルピオンは、スーの村から県道 D538 と D197 で南へ4キロである。クレからだと約18キロの距離にある。サン=ピエール教会は小丘の途中に広がる村の中心からやや北寄りの斜面に建っていて、北側を墓地に囲まれている。もともとはヴィヴァレー（現在のアルデッシュ県）のロンポン（Rompon）にあったクリュニー修道会のプリウレ（現在は廃墟が残るのみ）の傘下にあった。教区としてはデイー司教区に属していた。なおフランシオンは、もともとはスーのコミューンの中に組み込まれていた。独立したコム્યーンとなったのは1845年になってからのことである。

サン=ピエール教会の建設は11世紀にさかのぼる。壁面は全体的に不整形の小石材が荒積みされているが、西ファサードと身廊部の西側や屋根に近い上部などでは比較的規則正しく積まれている（足場を組むための小穴がいくつも見える）。11世紀～12世紀のロマネスク期の身廊の石積みは、下半分が砂岩、上半分が石灰岩である。この身廊の南北には、1867年になってあたかも側廊のような形で高さが低い側室が増築されている。東側から見ると、主身廊の半円形後陣と側室の半円形小後陣が3つ並んでおり、これらの小後陣の西側はあたかもトランセプトであるかのように見える。

西ファサードは高さがあって、一番上にはさらに頂部が三角形になったベイ1つだけの鐘楼が立っている。ファサードの中ほどの所に、半円形の小さなアーチが2つ連

なる窓が開けられている。アーチの間には、四角くて平たい冠板のような石のブロック（無装飾）を介してそれを受ける小円柱があり、その柱頭には渦を巻く植物文様が彫刻されている。一番下には、かつて開けられていた出入口のアーチの名残が見られる（クラヴォーが並んでいる）。出入口自体は今は埋められているが、半円頭形の窓が開けられている。頭部は半円形のモノリスであるが、古いものではない。この出入口は現在の路面からはかなり高いところにあって、これは路面自体が後の時代に低く下げられたのか、あるいは石段を使ってそこに出入りしていたのかも知れない。



26.3.10 Francillon-sur-Roubion

現在の扉口は身廊南側にある。19世紀のもので、クラヴォーの組まれた半円形のアーキヴォルトを方形の側柱が受け止める。この扉口の向かって右上には半円頭形の窓が開けられている。身廊の北側にも高い位置に半円頭形の窓が開く。また身廊北側の壁の向かって左下には、クラヴォーが並ぶアーチが残されている。墓地との間を行き来するために使われていた小さな出入口の名残である。

聖堂東端の主後陣は、左右の小後陣よりも高さがある。窓はないが、下部に半円頭形の大きな出入口がある。これは近代になって開けられたものである。左右の小後陣にも開口部はない。ただし主後陣の南北に19世紀になって増築されたトランセプト様の側室には、南北それぞれに半円頭形の窓が2つずつ開けられている。

聖堂内部は単身廊形式で、側壁に並ぶ壁アーチによっておおよそ5つのベイに分けられる。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトである。横断アーチは床までは下りていない。したがって側壁には横断アーチを受け止める壁付きのピラストルはない。内陣の天井は身廊のそれよりも高く、半円アーチによって支えられている。後陣は半円形で、半ドームが架かる。半ドームの起拱点にはコーニスなどは見られない。内陣の南北には、それぞれ19世紀に増築された側室が接している。

Bibliographie :

Brun-Durand (1891) p.151; Desaye (1989b) p.70; Rouquette (1980) p.41; RIP.

略記号と参考文献

各聖堂のビブリオグラフィーでは、文献などは和書、欧文文献（ファーストネームは略）、GV と RIP の順に、また Web site は最後に記した。

CAF : *Congr  arch ologique de France*. Soci t  fran aise d'arch ologie, Paris.

GV : Guide de Visite.

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

SAF : *Cahier de la Sauvegarde de l'Art Fran ais*, Paris,  ditions Faton.

Barruol, Guy (1992) : *Dauphin  roman*, La Pierre-qui-Vire, Zodiaque.

Bois, Michele et Burgard, Chrysteale (2007) : *Les ch teaux de la Dr me*, Veurey,  ditions Le Dauphin  Lib r .

Bornecque, Robert (2002) : *L'art roman en Dauphin  et Savoie*, Veurey,  ditions Le Dauphin  Lib r .

Brun-Durand, Justin (1874) : *Notice historique sur le monast re de Saint-M dard de Pi gros, aujourd'hui Pi gros-La-Claire (Dr me)*, Bar-le-Duc, Ancienne maison L. Gu rin,  diteur.

——— (1891) : *Dictionnaire topographique du D partement de la Dr me*, Paris, Imprimerie nationale.

Carlier, Patricia, Gu rin, Armand, Morin, Fr d ric (1989) : « Mirmande, Saint-Foy », dans *La Dr me romane*, Ferrier et al., p.42.

Carlier, Patricia et Morin, Elisabeth (1989) : « Sao , Notre-Dame », dans *La Dr me romane*, Ferrier et al., p.41.

Commune de Sao  (2011) : *Elaboration du plan local d'urbanisme de Sao , Diagnostic territorial et  tat initial de l'environnement*, Le Muy, Atelier Pierre MARINO.

Da Costa, Anne et Fabian (2000a) : *Ch teaux de la Dr me*, Ch tillon-sur-Chalaronne,  ditions La Taillanderie.

——— (2000b) : * glises romanes de la Dr me*, Ch tillon-sur-Chalaronne,  ditions La Taillanderie.

De la Torre, Michel (1992) : *Dr me, le guide complet de ses 371 communes*, Paris, Les  ditions Deslogis-Lacoste.

Desaye, Henri (1970) : « L' glise St. Pierre de Chabrillan », dans *Association universitaire*

d'études drômoises, Bulletin no.19, pp.3-7.

———— (1976a) : « L'Église Saint Marcel de Soyans », dans *Architecture religieuse dans la Drôme, Études Drômoises, numéro spécial*, Desaye, Henri et Peyrard, Maurice, et al., Valence, L'Association universitaire d'Études Drômoises, pp.63-65.

———— (1976b) : « L'Église de La Clastre », dans *Architecture religieuse dans la Drôme, Études Drômoises, numéro spécial*, Desaye, Henri et Peyrard, Maurice, et al., Valence, L'Association universitaire d'Études Drômoises, pp.71-77.

———— (1989a) : « Chabrilan, Saint-Pierre », dans *La Drôme romane*, Ferrier et al., p.42.

———— (1989b) : « Piégros, Notre-Dame de la Clastre », dans *La Drôme romane*, Ferrier et al., p.68.

———— (1989c) : « Piégros, Saint-Médard d'en Haut », dans *La Drôme romane*, Ferrier et al., p.69.

———— (1989d) : « Soyans, Saint-Marcel », dans *La Drôme romane*, Ferrier et al., p.69.

———— (1989e) : « Francillon, Saint-Pierre », dans *La Drôme romane*, Ferrier et al., p.70.

Serre, Robert (1989) : « Grâne, Notre-Dame d'Andéat (ou d'Andéac) », dans *La Drôme romane*, Ferrier et al., p.41.

Huot, Claude et Alcamo, Jean-Claude (1995) : « La tour de Crest : Évolution architecturale et fonctionnelle », dans *CAF, 150e session, Moyenne vallée du Rhône*, pp.69-90.

Huot, Claude et Serre Robert (2005) : *La tour de Crest, Forteresse et Prison*, Crest, Éditions Piégrâne.

Mailhet, André (1900) : *Histoire de la ville de Crest*, Valence, Imprimerie A. Ducros.

Morel, Jacques (2007) : *Guide des Abbayes et Prieurés en région Rhône-Alpes*, Lyon, Éditions Autre Vue.

Nadal, Joseph Cyprien, Abbé (1855) : *Histoire hagiologique ou Vies des saints et des bienheureux du Diocèse de Valence*, Valence.

Peyrard, M (1976) : « Église Sainte-Foy de Mirmande d'après une présentation de M. H. Desaye », dans *Architecture religieuse dans la Drôme, Études Drômoises, numéro spécial*, Desaye, Henri et Peyrard, Maurice, et al., Valence, L'Association

universitaire d'Études Drômoises, pp.119-120.

Rouquette, Jean-Maurice (1980) : *Provence romane 1*, La Pierre-qui-Vire, Zodiaque.

Thirion, Jacques (1988) : « Contribution à l'étude de la première sculpture romane dans le bassin du Rhône moyen : les chapiteaux de Chabrillan et de La Clastre », dans *Chaiers archéologiques*, no.36, 1988, Picard Éditeur, pp.111-135.

Vincent, Abel, Abbé (1864) : *Notice historique sur Soyans (Drôme)*, Valence, Imprimerie de Ch. Chaléat.